哲學研究　第二十一號　第十二冊　第二卷

最近のライブニッツ研究に就て

錦田義富

『ロッツェ妥當說の由來』九以下に於てライブニッツの妥當說を叙述する爲めの準備として、頃日彼の著作若干と彼に就て研究した文獻數四とを讀んだ。色々考へさせられたことが多かつたが、其中二つだけの目標を立てて此一文を草した。一つは主なる研究文獻について、其大體の傾向と特色とを未讀の人に紹介することを目的とし、今一つは、右の文獻に於て閑却或は輕視された方面——自覺と云ふ直接經驗の事實が、ライブニッツの哲學體系に於て演じて居る役目を明にする積りであつた。處が此第二の目的は、時日切迫して充分考を纏める餘裕がなくなつたので、後に自分で考へて見る材料に使ふ便宜上、ライブニッツの自覺と云ふ事實の意味を、單に分析的に羅列するだけで終つた。讀者に對して斯樣な仕上げを行はぬ素材を其儘提出することは、宛に濟まぬと切に感ずる次第であるが、然し此素材は又、讀者の隨意に加工撰取し得る餘地を與へる便宜を持つて居ると、身勝手の解釋をして、玆

に提供することとした(第五節)。第二節より第四節迄は、第一の目的に相應する部分であるが、其處では又、各研究書の間に多少の內面的關係をつけることと、夫れ等の各に對する批評をも添加した。研鑽の日も淺い私のことであるから、定めて見當違ひの關係をつけたり、的外れの批評もして居ることであらう。切に識者の是正を仰ぎたいと願ふばかりである。

尙此一文をば『ロッツェ妥當說の由來』九の補足とも豫備ともならしめたいとの希望が、私の念頭にはあつたことを附言して置きたい。

一

單に思想家としての側面だけに限つて見ても、ライブニッツ程多種多樣の世界に生きた人は尠からう。此點に於ては、博大と多面とに於て久しく學界の王者の地位を占めて來たアリストテレースと雖も、到底彼の敵ではない。苟しくも學問と云はるゝ程のものにて、彼の閱歷した內的世界の圈外に立つたものはない。而して驚くべきは、この種々なる思想の世界の殆んど總てに涉つて、彼が當代の最高頂に立つたことである。而して彼の創始開展せる多くの基本的思想が、現代思想界の諸分野に於て、現實に活きて働きつゝある强い力であることを見るに至つては、吾人は更に一層の驚嘆を禁じ得ないのである。目星しい一二の例を擧げて見れば、例へば數理を論理と同一基礎の上に置くと云ふ彼の洞見が、現代の純粹數學に對する關係の如き

之れである。斯かる向は、ヴィエート (Viète 1540—1603) の記號法を採用して普汎數學 (Mathesis universalis) を樹立しようとしたデカルトに、既に明白にあらはれては居るが、然し此考案を大規模にし徹底せしめ、一方論理と數理とを一層深い根柢に於て結附けると共に、他方之を嚴密精細に開展して、直ちに近代純粹數學の想源となつたのはライブニッツである。彼が二十歳の時に立案し (Dissertatio de Arte Combinatoria 1666. G. IV. P. 27—102) 後屢々改善補正を試み、終に之を完成する迄には至らなかつたけれど、終世之を念頭より離すとの出來なかつた夫の Characteristica Universalis 及び其一部分をなす處の Calculus ratiocinator の說は、數理を論理と異る基礎に置くカントの威光に壓せられて、久しく世に埋もれて居たが、第十九世紀の中葉ブール Boole. ドゥ・モルガン De Morgan の記號的論理 (symbolic logic) の研究によつて復活され、次でヴェン Venn. シュレーデル Schröder. ペアノ Peano の數學的論理と開展し、ブレーゲ Frege. ラッセル Russell. クーツラー Couturat に至つて集大成されたかの觀がある。是等の學說をライブニッツに關係せしめて考へれば、ブール、ドゥ・モルガン、ヴェン、シュレーデル、クーツラー等は彼の Calculus ratiocinator (論理の微積分) の方面を開展したものであり、ペアノ、ブレーゲ、ラッセルは彼の Characteristica universalis (Lingua characteristica 普汎數學) の方面を發展さ

したのであるとも云へるであらう(Couturat, Laogique de Leibniz, Chap. IV., VII., VIII.Jourdain, Introduction to Couturat's Algebra of Logic 1914)。實在を機械的に觀るとの故を以つて非難の當體とはして居るけれど、ベルグソンが意識の直接與件に訴へて實在の眞髓を把捉しようとの思想、乃至其不斷創造の現在を說く處が、ライブニッツの實體としての自我觀や、彼の個體卽無限の說より歸結する處の現在は過去を背負ひ未來を孕む (le present est gros de l'avenir et chargé du passé, tout est conspirant. Nouv. Essais. Preface. G. V. 48) との深い考に負ふ處なしとは云ひ難いであらう (Bergson, L'Evolution Creatrice. 375 ff.)。有機體の機械的說明を、スタール (Stahl) の生氣說 (Animism) に反對して高唱せる爲め (Considération sur le principe de vie et sur les natures plastiques 1705.G. VI, 539—546)ブリーシに尊重はされないけれど (Driesch, Der Vitalismus als Geschichte und als Lehre 1905.S.22) ライブニッツが機械的自然の根柢には無窮に進展して已まざる傾動或は意慾 (tendences ou appetites) を本質とする實體がある、而して動物や植物の實相も之に外ならぬとの目的觀的動的實在觀は、ドリースの仰で祖とするアリストテレースのエンテレカイア說と共に近代活力說の一想源をなすものと見做して左程不都合はないであらう (Vlg. L. Stein, Der Sinn des Daseins 1904. S. 113.)。當時の數學及び自然科學の大進步に密

接に接觸し、其方面の專門的研究に於て自からも偉大なる業績をあげたと云ふ理由——他の如何なる理由にもよらず此理由のみにて、ライブニッツは今日尙活きて居ると云ふストゥンプの評價根據は、彼の如く哲學は自然科學的基礎の上に立たねばならぬと主張する人々にのみ通用する根據であるにしても、『今日尙活きて居る』(heute noch lebendig) と云ふ評價判斷だけは、何うしても動かぬ處であるやうに思はれる(Stumpf, Die Wiedergeburt der Idealismus 1908, S.21 f.,29)。

種々なる方面に於てライブニッツの行つた創造的業績——夫れが二百年を隔つる今日に於て却つて其眞價を發揮しつゝあると云ふことは、彼の偉大を示して餘りがある。然し是等の多樣を概念の形に於て統一する哲學的本質力が微弱であれば、たとひ專門科學者として第一流に位することを許されても、哲學者としては終に亞流の域を出づることは出來まい。彼の哲學には此一切を產むと共に總てを緊握する統一觀念があつたか。之を一の組織的全體と觀ずることが出來るか何うか。ライブニッツは此點に於て、極めて不利なる解釋を受くるの餘儀ない狀態に居る。先づ彼の哲學的著作は、彼の哲學的思想以上に多角的であり散漫である。何れの著作をとつて見ても、彼の哲學體系を總括的に述べたものが無い。大は『人間悟性新論』『辯神

論』より、小は覺書手翰に至る迄、幾千の著作は、其成立の動機に於て、其表現の體裁に於て、而して更に惜しむべきは屢々其思想の內容に於て、遠心的依他的である。ヘーゲルが一箇の形而上學的小說と嘲つたのも、萬更酷評でもない樣に思はれる (Seine Behauptungen erscheinen als willkürliche Vorstellungen, ein metaphysischer Roman. Hegel, W, XV. S. 454)。彼の創造的獨創、活き活きとし光彩ある多樣をたゝへる人にも、その統一力の弱さ迎合應化の才の饒なるを悼むの心がほの見える (Windelband, Gesch. d. neuer. Philos, Bd. I. 5 A. S. 459 ff)。然らば彼は卽興哲學者 (ein Gelegenheitsphilosoph.— v. Stein, Geschichte des Platonismus, B. III. S. 254) の名稱を甘受せねばならぬか。自己の哲學全體を見通しも仕上げもしない人と笑はれる外ないであらうか (er hat eigentlich das Ganze seiner Philosophie weder übersehen noch ausgeführt.——Hegel. W. XV. S. 453)。然るにライブニッツ彼自からは、自己の學說に統一あり連關あることを隨處に繰返し言明して居る (G. IV. 494, V. 48)。實際彼の異常なる創造力が、何等の內面的統一もなく、隨緣應機に働いたとは、受取り難い處である。茲に於てかベルグソンの所謂哲學的直觀を、ライブニッツに發見しようとの新なる企圖が、自然に起つて來なくてはならぬ。彼が遠心的表現の裏に求心的中心點を、彼が多樣の內に働ける統一力を發見し、これによつて彼の總ての學說を、

一の組織的全體として理解せんとする努力が生れて來なくてはならない。其先驅をなしたものは恐らくディルマンであらう(Ed.Dillmann, Eine neue Darstellung der Leibnizischen Monadenlehre auf Grund der Quellen.1891)

二

ディルマンによれば從來のライブニッツ哲學の叙說には三つの大なる缺點がある。第一には彼の哲學體系の主要諸相の活源となつて居る一つの根本思想(ein Hauptgedanke)が明にされて居らぬ。彼等は彼の體系構成を支配する一の根本傾向(eine Grund tendenz)を看破して居ない。從つて彼の哲學が先行哲學に對する歷史的位置の不明瞭と云ふ第二の缺點を生ずる。此故に又彼のモナード論の由來についても今尙全く不確實であると云ふ第三の缺點が作らて來るのである(Ibid., 12 ff.)。其由つて來る處を究めて見ると大略三つの原因がある。ライブニッツが自己の哲學の核心と見做して居る個性的實體實體的形相卽ちモナードの說を初めて說き出し自己獨特の思想の誕生期を示すものと言明して居る最初の著作『形而上學講說』(Discours de Metaphysique 1686)にては、運動の相對性を闡明することによつて個性的實體を立證

し、次で之を開展せる『アルノールとの往復書翰』(Briefwechsel zwschen Leibniz, Landgraf Ernst von Hessen-Rheinfels und Antoine Arnauld 1686-1690) にては、物體の本質を究明することによつて實體的形相を擁護解說し、最後に彼の體系の基本概念を完成せりと云はるゝ『實體の性質及び交渉についての新體系』(Système nouveau de la nature et de la communication des substances 1695) に於ては、アトム論の批評によつて其モナード說の基礎附けを試みて居る。之れによりて見ればライブニッツは機械的自然觀の基本概念・根本原理の檢覈から出發して、其モナード論に到達せること明らかである。然るに從來學者のライブニッツを叙するや、多くは此根本學相を顧慮しないで、直ちに其形而上學なるモナード論を述べて居る。これがやがて多くの誤解や紛亂を生ずる第一原因である。會々物體概念の批評的解明が、彼の體系の起點をなすものであることを認めた人があつても、此解明から彼の體系全體を派生し來らうとはしない。此解明の結果として物體の實相の單純活動的モナードなることが一度確定されると、當初の解明方針は全く之を捨てゝ顧みず、出發點とは別個の新なる方途をとり、單純性・活動性と云ふ如き抽象空虛の概念から、論理的に凡ての敎說を導き來らうとする。これが彼の學說の統一を見失はしむるに至る第二の原因である。而して斯くの如き解

說方向に援助を與ふるものは、ライブニッツ彼自らの『モナドロジー』(Monadologie.1714)である。此作に於て、彼は單純不可分の實體概念から出發して其種々の性質を論理的に演繹し、其必然的歸結として心理學的形而上學的神學的諸相を導き出して居る。其說述の簡明にして理路の整然たるに欺かれて、人は直ちに之を彼の學說叙述の基本とする。之が多くの不明點を生ぜしめる第三の原因である。此作が彼の著述中最も簡潔提要のものであると云ふことは一個の事實である。然し事實は必ずしも權利ではない。ディルマンは三つの理由よりして、之を叙說の基本所依とすることを退けた。自餘の著作にては凡て物體概念の批評的考察から出發して實體論が說かれて居るのに反して、此作にては——而して此作のみに於て——全然抽象的演繹が用ゐられてある。兩者の間には、その論證の仕方の上に顯著なる相異がある。然るに此作だけにあらはれた立證法を基本とし、その他の主要述作を捨てるのは、少くとも勝手な仕打との難を免れない。或は此作が彼の晩年の筆になれるが故に、彼の體系を最も完全に表現したものと見なくてはならぬと云ふ論が出るかも知れぬ。然し晩年の作が必ずしも最完全ではない。學說の最も正當なる會得は之を發生的に研究して初めて獲られるものである。加之此作は他の總ての作と異る根據の上に

モナード論の原理を置いたものであるから、これのみを採用する時は彼の他の著作の所說と矛盾する處が非常に多くなつて來ると云ふ、ライブニッツ自身にとつて甚だ不都合なる結果を生ずるのである。此故にディルマンは曰ふ Wir werden dann sagen müssen, dass die„Monadologie" nicht die wahre Form der Monadenlehre darstellt, sondern dass sie als ein gelegentlicher Versuch Leibnizens, dasjenige, was er auf ganz anderem Wege gefunden und auch in seinen sonstigen Schriften auf ganz andere Gründe gestützt hat, apriori wieder abzuleiten, verstadnen werden muss. と(S.2-12)。夫れでは氏が認めて以つてライブニッツの『根本問題』『根本傾向』となし、凡ての命題が眞實の齊合と必然の歸結とを以つてそれから出で來るとなすものは何であるか。氏によれば、夫れは近世の機械的自然說明の基本となる原理其者は機械的ではあり得ない、機械論の諸原理は却つて古代及び中世哲學者の說いた所謂實體的形相に發見すべし、と云ふ一の根本思想に外ならない。而して彼のモナード論は此根本傾向によつてのみ十全に理解されると言ふ。(Ibid., S.510. ff,521.f.)。彼の實體觀念を右の傾向によつて解釋する時は、次の如きものとなるのである。

Und dementsprechend sind die Monaden nicht die Ursachen, die Gründe der Erscheinungswelt, sondern sie sind die Seelen zu Körpern, die Substanzen zu Phänomen, sie sind mit einem Wort die *Repräsenta-*

tionen der Phänomene.(S. 74)。　或は又 Also ist die Monade nicht die Grund für die Existenz der körperlichen Erscheinung, sondern.....sie ist das *Prinzip für das Phänomen* des Körpers selbst. (S.314 f.)。

用語の上にても知られる通り、實在論的見方を全く、脱し切つては居ないが、ディルマンの企圖は、機械論と目的論との調和を形而上學的に試みたのであると云ふ在來のライブニッツ解釋を、認識論的に轉釋せんとするにあること明かである。卽ち彼を以つて機械觀に立脚する近世自然科學の Apriori を闡明した一個の批評的哲學者に擬するものである。彼の功績と認むべきは、第一にモナードを普通の意味にての實體と解することを斥け、之を自然現象の原理又は法則と解釋することによつて、ライブニッツの哲學全體に統一を與へ得べしと云ふ新しい着眼點を提出したことである。第二には『モナドロジー』が自餘の著作と著しく異る點あることを指摘し、之を基礎として彼の學說再構成を行ふの危險を警告した點である。後のライブニッツの研究者が何れも此作以外の著作にライブニッツの思想の關鑰を求めるに至つたのは、彼の警告に負ふ處ないではなからうと思ふ。

このカントの意味に於ての現象論的認識論的ライブニッツ解釋を、一層カント的に廣く且つ深くして行つたのは、カッシラーである (E. Cassirer, Leibniz' System in seinen wissen

-schaftlichen Grundlagen.1902. Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft. der neuren Zeit. Bd. II. 1906, 2A. 1911. Bh.5,Kap. 2,Leibniz)。彼はディルマンよりも遙に廣くライブニッツの著作を研究し、其中心動機が思索生活の抑もの初めから眞理問題にあつたことを明にし、此問題は實に彼の全體系のアルファにして又オメガであると論結した(System, 532.Erkenntnisproblem, II, 132,189f.)。彼の最も力を致した點――而して同時に又最も出色の研究を行つた方面は、ライブニッツの現象論の中心觀念となつて居る『結合』(liaison, Connexion)、『關係』(relation, rapport) の眞義を發揮した處にある。次にあげる純粹論理派の人達が、ライブニッツの論理・數理の基本觀念となつて居る命題の分析的見解を基點として、總てを解釋しようとの努力と、互に相補足して初めてライブニッツ哲學の中心契機たる眞理觀の全豹を獲るに庶幾いかと私は思うて居る。カッシラーは關係的思惟、綜合的統一の原理が、ライブニッツの論理・數理を初めとして(茲にては尙分析的思惟が優勢なることをカッシラーも認めて居るが)、力學・物理學・意識論・個性論・生物學・歷史論・法理學・美學・神學に於て如何に連續的に進展して行つて居るかを詳細に該博に研究し、一見奇異に思はれる所說も夫れ夫れ深い認識論的省察を根柢とするものであつて決して偶然の思附きでないことを明白にした。同時にその學說に含

まれる矛盾や缺陷、又當時として免れ難かつた淺見を指摘する事をも忘れなかつた。彼の手によつてライブニッツはカントを距る一歩――極めて接近せる點迄近づけられた。例へば、ライブニッツがモナードの內面的活動として知覺作用と傾動作用を、カントの統覺作用の歷史的豫備と見ること勿論新見解でも何でもないが、之を有ゆる方面より詳しく研究し、就中傾動作用をマールブルヒ派の意味に於ての Anticipation と解した點などは、非常に面白い又深い解釋であると思ふ(System, 375)。ライブニッツの意識作用についての學說の解說としては(一面觀ではあるが)、私の讀んだものゝ中で最も秀れて居る。既出の研究中恐らく同情ある深い研究の隨一と評して差支ないと思はれる。

三

此カント的認識論的解釋に對立して、ライブニッツの純粹論理的方面を基本とし、これによつて彼の學說を統一的に理解しようとの企圖が獨立にあらはれて居る。現代に於ける客觀的妥當說の一巨頭、ラッセルの研究は卽ち其初めをなすものである(B. Russell, A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz 1900)。彼によれば、ライブニッツが自

己の學說を總括統一しなかつたのは、全く外的因緣に由來するのであつて、彼の思想の內容其者が之を拒むのではない。彼の思想の本質は、スピノーザの哲學よりも遙に嚴密に論理的に、よく若干の定義と公理とから幾何學的に演繹し來ることが出來るのである (p. 1)。斯くて彼は其演繹の前提となるものとして五個の命題を揭げた。

I. Every proposition has a subject and a predicate.

II. A subject may have predicates which are qualities existing at various times. (Such a subject is called a substance).

III. True propositions not asserting existence at particular times are necessary and analytic, but such as assert existence at particular times are contingent and synthetic. The latter depend upon final causes.

IV. The ego is a substance.

V. Perception yields knowledge of an external world, i. e. of existents other than myself and my states.

而してライプニッツの哲學に存する不齊合は、其時代の俗見に反せる如き歸結を許すことを恐れたと云ふ外的事情と、今一つ根本的には前揭前提の第一と第四第五との

間に存する不齊合と云ふモナード論一般に共通の內的理由との二つに基くと云ふ(p. 3-4)。今此五前提を通覽して見ると、第一第二第三と第四第五と二つの種類に區別して見ることが出來る樣に思ふ。私は便宜上之れに名を與へて、前者を論理的前提と云ひ、後者を實在的或は心理的前提と云ひたい。後者を心理的と云ふのには異論が起るかも知れぬがラッセルが右の二前提を採り來つた源泉は、後にも說く如くライブニッツが自覺の事實としてあげた二つの命題を變容したものに外ならぬから、斯る命名も不當でないと思ふ(第五節參照)。さてラッセルの研究の結果によれば、論理的前提の開展に止まる間は、ライブニッツの學說は極めて齊合的で、且つ彼の最も獨創的有價値の部分をなして居るが、之に心理的前提が加はること多きに從つて、漸次不齊合の點を增し、獨創的たることを失つて來ると云ふ。一般に妥當說は、それが主觀的であつても客觀的であつても、遂に存在と價値との二元論を脫却することの出來ないものであるが、ラッセルの立脚する如き客觀的妥當說に於ては、此事愈〻顯著に、否却つて兩者を峻別する處に其學說の生命を托して居るのであるから、此立場から批評的にライブニッツを檢覈する時、癒す可らざる根本的不齊合を彼に發見するは、當然の次第であらう。然し批評哲學以前の近世哲學者中、彼程妥當說、わけても客觀的妥當說

を明白に嚴密に考へた人の無いことが、ラッセルの研究によつて顯揚された。ディルマンによつて見逃された『形而上學講說』『アルノールとの往復書翰』に存する方面——而してディルマンの見た方面よりも一層根本的の方面に著眼し、ライプニッツの哲學の基本思想が作用と獨立の命題自體の究明より出立する眞理の客觀的考察に存することを立證開展し、ライプニッツに含まれたる曖昧點を指摘糾彈するあたりは、ラッセルの鋭き分析力を示して餘りがある。論理の方面の研究に於て、遙にカッシラーを拔いて居ると私は思ふ。たゞ問題は氏の掲ぐる第四第五の心理的前提が、果して論理的前提と矛盾するや否や、又夫れがライプニッツの最も價値少き學相を產むものであるや否やである。（其前に前提が正しくあげられて居るか何うか、又それは前五者に盡されて居るか何うかの根本問題がある。次に云ふクーッラーは更に之を二つに要約して居るが、これは正當には、ラッセルのあげた論理的三前提の一面を徹底さしたものと見る方がよいであらう）。客觀的妥當論者のラッセルより見て問題にならぬことが、ライプニッツにとつては重大なる問題であり、而して夫れが又哲學の根本問題でもあることを切に思はせられるのは、氏によつて輕く取扱はれた知覺作用傾動作用の方面である。此點はカント學徒たるカッシラーの研究に比して著しき遜色がある。

然しカッシラーとラッセルとは、一方が認識論の方面に深く、他方が論理の方面に鋭く行つて居ると云ふ點に於て、ライプニッツ研究中最も注目すべき文獻を提出して居る。

ラッセルと同一見的に立ち彼とは獨立にライプニッツの論理を數理と併せて最も詳細に研究したのはクーツラーである (Couturat, La logique de Leibniz d'après des documents inedits. 1901)。而してラッセルが、ライプニッツの思想獨立期を示すと云はるゝ『形而上學講說』(1686) 以後の著作を主にして研究して居るのに對して、クーツラーは、豐富なる未刊著作を材料として、彼の思想生活の抑もの初めから、其論理思想の漸次に發展し來れる徑路を分析的に研究し、客觀的妥當論・客觀的眞理の說が彼の哲學の出發點であり、又その終世省察の對象であつたことを明示した。クーツラーによつて、彼の哲學の源頭の純粹論理なることが、殆んど決定的に證明されたと云つてよいであらう。クーツラーは自己の研究を總括して、要するにライプニッツの論理には二つの根本原理或は要請がある。(1) Toutes nos idées sont Composées d'un trés petit nombre d'idées simples, dont l'ensemble forme l'Alphabet des pensées humaines; (2) Les idées Complexes procèdent de ces idées simples par une Combinaison uniforme et symétrique analogue à la multiplication arithmetique. (Ibid. p 431)。之を一層簡潔に言表すれば、『總ての眞理は分析的なり』と云ふ立場に歸

する (Toute verité est analytique. Préface. XI.)。ラッセルはライブニッツの偶然的眞理を、カントの意味する綜合判斷に相當するものとし、分析判斷に對立する位置を與へ之にも重きを置いたが (opt. cit.p. 9)、クーツラーは、分析的命題を學問の理想とするライブニッツは、綜合判斷をも分析判斷に還元しようと力めたのであるとなし(opt. cit. p. 208 f.)、ラッセルの命題論中心に對して名辭論中心を稱へた。矛盾律に基く分析命題を眞理の理想的形態とし、基本的命題を同一判斷に求めたライブニッツの分析的思考法を根本的と見れば、命題よりも之を構成する概念或は單純觀念が最根本的とならねばならぬ、理由律も矛盾律に還元されねばならぬ。ラッセルのライブニッツ觀の一面はクーツラーによつて最も詳細徹底的に裏書きされた譯である。而してクーツラーは斯る分析的思考は、單に論理のみならず彼の全哲學體系を支配する原理である。la méta-physique de Leibniz repose uniquement sur les principes de sa Logique, et en procède tout entière (X.)。『モナドロジー』に說かれたる實體論の總ての主張は、理由律に歸する。而して理由律の眞義は、總ての眞理が分析的なることを意味するに過ぎない。一言にして彼の形而上學を評すれば汎理論であると云ふ (c'est un panlogisme. XI.)。ラッセルの五前提を二前提に――而も最も徹底した分析的論理の原理に歸著せしめて見れば、ライ

ブニッツの論理の最大缺陷は『關係の論理』(la Logique des relations)を認めない處に存すること、氏の言ふ通りである(Ibid.,437 ff.)。然し甚だ大膽な言方ではあるが、之を認めないのは氏であつて、ライブニッツ自身ではないと評したい。私の讀んだのは主に千六百八十六年以後の所謂成熟期後の著作が多いし、而して讀了せる數も氏に比べては元より云ふに足りない少數ではあるが、然し氏の研究の結果では、第一にライブニッツの意識作用自覺作用に就ての深い思想を理解せしめるに甚だ困難である。氏は此方面については充分の顧慮を拂つて居らぬ。第二に偶然的眞理、存在(綜合)命題の特質が判明しない。此事は氏の理由律についての解釋によくあらはれて居る(Ibid., 214 ff.)。矛盾律に基く同一判斷の外に、理由律に基く綜合判斷を確認した處に、ライブニッツの新と偉とがあると云ふ、ラッセルの見解に、私は同意を表したいと思ふ。尙クリッツラーの一面的なることは、既にカッシラーも批評して居る處である(System, 541 ff.)。一面的ではあるが、論理數理の方面に就ては最も詳しく、且つ成熟期以前に於ける思想の發達は、氏によつて初めて充分に明にされた功や大であると云はねばならぬ。

在來のライブニッツ解釋はモナード論を基點或は中心として彼の哲學を考察した爲め、動もすれば彼の多角性が卽ち皮相性と見え、之を統一ある組織體として理解すること困難であつた。ディルマン、カッシラーはより多く認識論的にラッセル、クーツラーはより多く論理的にと云ふ、關心著眼の方面は少しく異れども、何れもライブニッツの哲學の眞の出發點その核心をなすものが、眞理問題・認識問題にあること、而してこれを樞機として初めて彼の哲學思想全體が一の嚴密なる體系をなすこと、と――少くとも從來考へられたよりは遙に統一的なる組織を有することを闡明した。此事は後のライブニッツ研究者にとつて決定的意義を持つ點であると思はれる。問題は此論理的認識論的見解は窮竟のものであるか否かと云ふ點に存する。詳しく云へばライブニッツの出發點が論理而かも分析的論理にあること、とは明であり(クーツラーによつて)而して之を開展する內に綜合判斷を認め(ラッセルの云ふ如く)是等兩種命題についての省察の歸結が、彼の形而上學の主要部分を構成するものであることは爭はれない。然しそれだけが唯一或は最も重要にして且つ有價値なる部分を形成すと見るべきや否やが問題である。ラッセルの前提を借りて云へば、氏の第四第五――卽ち心理的前提は果して氏の云ふ如く獨斷的形而上學の前提であり(opt. cit. 42 f.)從つて

又自餘の前提と矛盾し不齊合を將來する因となるや否やと云ふ學說再構成上の問題と、此の心理的前提及び其開展は氏の云ふ如く價値少き部分をなすや否やと云ふ學說評價上の問題との二つが、提起し得られるのである。此點に於ては流石にカントの流れをくむカッシラーは最も同情あり深き解釋を下して居るが、夫れさへ尙一面觀たるを免れない。卽ち氏は此の前提の意味する實在論的契機を輕視して、之を餘りにカント的に解明したるやの感がある (System, III. Teil, 7 Kap., Das Problem des Bewusstsein)。其研究の深さと詳しさに於て前四人の何れに比しても甚しき遜色あり、之を對等の地位に置くは如何はしいと思はれるけれど、此心理的實在論的契機に注目し、之を學說全體の基點としようとしたジルベルスタンの研究は、其著眼の新に於て見捨て難い節がある (A. Silberstein, Leibnizens Apriorismus im Verhältnis zu seiner Metaphysik. 1904)。(彼の先天主義と稱するものは、論理的先驗論と云はんよりは、寧ろ甚だ心理主義に近いことを注意して置かねばならぬ。茲に氏の先天主義の定義をあげて置かう。Jede Ableitung einer Erkenntnis aus dem erkennenden Subjekt, gleichviel auf welchen Wege dieselbe zu ihm komme, nennen wir Apriorismus. S.4)。

ジルベルスタインの努力は、ライブニッツの哲學の構成が意識の直接經驗によつて

根本的規定を受けて居ることを顯さんとするにある (ihre endgiltige Ausgestaltung verdankt die Substanz Leibniz', trotz seiner idealistischen Ansätze, doch der inneren Erfahrung. S.9)。氏は先づモナードの性質、物體の本質、物心の關係、實體相互の間に存する豫定調和等ライプニッツの形而上學の諸相が、內的經驗・認識主觀についての反省に基くことを說き、次に此モナード論の基礎の上に認識作用が如何樣に說明されて居るかに移り、無意識說・認識階段說・先天生具說を右のモナード論の立脚地より演繹し來らんと試み、最後にライプニッツが自ら之を意識することなしにカントの批評哲學に近づき來れるを指摘して曰く、er strebt an ..... das Apriorische auf das Formale in der Erkenntnis zu beschränken, während er das Material derselben aus der sinnlichen Erfahrung herleitet. S. 49)と。氏が內的經驗の重要を高潮する點に於ては私は同感を禁ずることが出來ないが、第一にモナード論を基礎として認識論及び論理學を演繹し來らんとする方針と、第二にその所謂認識主觀やアプリオリに對する解釋の心理的經驗的なるに過ぐるの點を飽足らなく思ふものである。ラッセル、グーツラー、カッシラーによつて、ライプニッツの思索生活の初頭——而して又一生を支配しつゝあつたものが、命題論・定義論、一言にして云へば眞理の問題であつたことの殆んど決定的に闡明された今日、ジルベルスタインの採つた

途は、妥當として許容すること困難である。又內的經驗や認識主觀を重視するはよいとして、其所謂內的經驗なるものがライブニッツに於て如何なる意義に用ゐられて居るかを先づ究明した後でなければ、徒らに混亂と淺化を招くの基となるばかりである。內的經驗と云ふ重寶なる名にかくれて、何事をも之によつて解釋せんとする如きは、許す可らざる獨斷である。況んや此美名の下に屢淺薄なる個人的經驗が思想上の越權を行ふこと多きを見るに於てをや。ジルベルスタンの云ふ內的經驗は明白に其弊を示して餘りがあるのである。

五

議論の進め方と解釋の下し樣に異存はあれど、私も亦ジルベルスタインの所謂內的經驗——私は之を自覺と云ひたい——が、ライブニッツの哲學體系に重要なる役目を演じて居ると見るものである。書かれた年代の早いのと、後の進んだ見解を素朴な從つて露骨な形に於て表現して居る點に於て、極めて注意すべき一文を、少し長いけれども玆に引用して、夫れが如何なる意味を持つて居るかを檢べて見よう。

Mais quoyque l'exitence des necessitez soit la premiere de toutes en elle même et dans l'ordre de la

nature, je demeure pourtant d'accord qu'elle n'est pas la premiere dans l'ordre de nostre connoissance. Car vous voyez que pour en prouver l'existence, j'ay pris pour accordé que nous pensons et que nous avons des sentimens. Ainsi il y a deux veritez generales absolues, c'est à dire qui parlent de l'existance actuelle des choses, l'une que nous pensons, l'autre qu'il y a une grande varieté dans nos pensées. De la premiere il s'ensuit que nous sommes, de l'autre il s'ensuit qu'il y a quelque autre chose que nous, c'est à dire autre chose que ce qui pense, qui est la cause de la variété de nos apparences. Or l'une de ces deux veritez est aussi incontestable, est aussi independente que l'autre,..... (Premiere lettre à Foucher, 1676. G. I. 370)

此文を分析して見ると次の如き五個の注意すべき點がある。

第一、必然的理性的眞理は其自身に――即ち本然の順序に於て永遠に實存し敢て自覺を待たないが認識する作用の側より云へば認識主觀の實存が第一義である。本然の順序と認識の順序とを區別し、必然的眞理と自覺的事實とを夫れ夫れに於ての第一位に置いた點と、兩者共に他によつて證明すべからざる窮竟的絶對的のものであるとした點は注意を要する。

第二、自覺の解釋は明にデカルトの吾思我在の說を受けたものであるが、これ

に今一つの命題を加へ、自覺と云ふ一個の事實は、同樣に確實眞實なる二個の命題を含意するとなした。一は『吾等思ふ』であり、他は『吾等は種々多樣の思想を持つ』である。

第三、『吾等思ふ』から『吾等在り』が歸結する。

第四、『吾等は種々の思想を持つ』からは、先づ其種々の思想が、吾等に對する現象(apparences)として(吾等の意識內容として)の所與であると云ふ現象論的解釋が從つて來るし、今一つには

第五、其雜多の現象の原因として、吾等以外にも吾等と同等の權利に於て存在する實體があると云ふ實在論的解釋も歸結して來る。

右の引文は私の發見し得たる限りに於ては、最も早き時代に屬して居るから、ライプニッツの思想發展を研究する上に甚だ重要なる材料である。のみならず思想獨立期(千六百八十六年)以後の論旨も、自覺に關する限りに於ては略々上の五ヶ條を主とする樣に思はれる (De synthesi et analysi universali seu Arte inveniendi et judicandi, G.VII.,296. Leibniz gegen Descartes und den Cartesianismus, VIII,1690?. G. IV.327,329. Animadversio in partem generalem Principiorum Cartesianorum, in Partem Prima, 1692. G. IV. 537. Nouveaux Essais 1704.G. V.

347f., 391f., 415)。これに今一つ自覺が必然的眞理に對する積極的關係をあらはす一ケ條を加へれば、ライプニッツの哲學に於ける自覺の意義を考察する材料としては略々遺憾なきに近いと思はれる。今一つの箇條とは、自覺は必然的眞理の認識によつて初めて成立するもの、後者は前者を待たずして永遠に實存するが、前者は後者を前提して初めて可能であると云ふ思想と(Lettre à Arnauld, VIII,IX. G. II.43,53. Principe de la nature et de la grace §4-5., Monadologie, 29-30)、其必然的眞理は自覺によつて初めて顯はに認識されるものであつて自餘の狀態にては單に潛勢狀態に止まるだけであると云ふ思想(Nouveaux Essais, Preface, G. V. 44ff)とである。即ち必然的眞理は妥當性に於て主觀を超越し之と無依に實存すると云ふ第一條を補完するものとして、それが存在者としての認識主觀に對する積極的關係を規定したのが、茲に云ふ追加箇條の意義である。此方は個性的實體概念が確立し、進んで先天生具說が提唱されるに至つて初めて考へられた處であつて、超越的眞理が如何にして主觀に內在するに至るか、夫は如何にして存在に對して妥當するかの問題が、省察對象となつた時には、必ず追加せらるべき箇條である。(順序より云へば此追加箇條は、第一條と第二條との間に來るべきものであらう)。

繼つて初めの五ヶ條を見るに、思想の進展につれて必要なる修正を受くると共に、考へ方も言現はし方も嚴密になつて居る。第一の本然の順序にての第一と認識の順序にての第一と云ふ言方は、『悟性新論』にも用ゐられて居るが (G. V. 69 f)、多くの場合には、必然的理性的第一眞理に對して、存在的經驗的第一眞理と云はれる (les premieres veritez apriori.....les premieres veritez aposterioi G.V.415. Vlg. V. 347 f,391 f.)。卽ち矛盾律に基く同一判斷、單純可能的者に對して、理由律に基く存在命題中最も基本的原本的なのは自覺であると云ふ意味である。次に確實性に就ては、飽迄も兩者に差別を、認め、前者が必然的であるに對して後者は必然的であるとは云へぬとして居る。然し自覺は他によつて證明することの出來ない直接の眞理であるから、之を自餘の存在命題と同一列に扱ふことは出來ない。夫れで公理と云ふ名を廣く Non-prouvable の眞理と云ふ義に用ゐれば、自覺は公理 (l'Axiome. (G. V. 392) である。必然的第一眞理と自覺てふ第一經驗 (les premieres Experiences) とは、共に他によつて證明することの出來ない直接の眞理である。異る處は直接と云ふ意味に於てである。前者は命題の主辭と賓辭との間が直接であり、後者は悟性と對象との間が直接であると云うて居る (G.V. 415)。之を別言すれば前者は A=A の直接であり、後者は作用と對象との同

一性と云ふ意味の直接であるとの意であらう。茲迄來れば最早兩者は殆んど合一するに近いて居る。ライプニッツの自覺についての見解は餘程深くなつて來て居ると思はれる。

第二條についての修正は、『吾等』に置換へるに『吾』(ich)てふ單數名詞を用ゐた點を主とし、自覺に含意せられる第二命題の言表はし方に多少異つた表現が用ゐられて居ると云ふ點あるのみである。個體的實體說が確立すれば『吾』てふ單數名詞の用ゐられねばならぬこと明らかである。又別樣の表現法と云うても歸する處の意味は變らない。自覺を一切存在認識の基本とし綜合判斷の根元と想定する以上は夫は統一の原理であると共に又雜多の原理でもあらねばならない。モナード無窓說、實體卽內面的開展力の說を說くと同一理由からして、ライブニッツに於ては、認識の素材、經驗的所與は外から自覺に與へられると云ふことは許されない。雜多は自覺の內に於て潛在的にか現勢的にか最初より內含されて居ねばならぬ。自覺は初めから雜多の統一である、非合理と合理との同一態である。ライブニッツの自覺の考方は確にデカルトに數步を進めたものと云はねばならぬ。(此自覺の眞義は後フィヒテによつて最も明白にされた)。

第三條に對しては、『吾思ふ』と『吾在り』との間に推論式が成り立つかの如く誤解されるのを恐れて、屢〻此事に論及し、自覺の第一義は思惟する働きと思惟する存在との同一態を意味することを縷說した。卽ち penser et estre pensant est la même chose (G. V. 391) である。而して玆に注意すべきは存在と云ふ意味である。ライプニッにあつては眞の存在は常に動 (activité) である力 (force) である。quod non agit, non exist である (Vlg. De primae philosophiae Emendatione, et de Notione Substantiae. G.IV. 468ff.)。而して此動此力と云ふことが卽ち實體の本質である (omnem substantium agere, et omne agens substantiam appelari. G. VII. 326.)。凡ての實體は働く、凡て働くものは實體である。而して働かざるものは實體ではない (Ce qui n'agit point, ne merite point le nom de substance. G. VI. 350)。ラッセルが第四の前提としてあげた自我は實體であるとの命題は、卽ち、此自覺の事實に基く働き卽ち存在、存在卽ち働きを抽象的に表現したるものに外ならない。(此自覺の根本特質を理解して置かぬとライプニッの實在觀は頗る不明のものとなつて來る恐れがあると思ふ。而して此方面も亦後フィヒテによつて深化された)。

第四條については、表現に根本的の修正はないが、自覺の內容たる雜多或は現象が單なる假象でなくこれには嚴たる客觀性の存することを、自覺の綜合作用によつて

説明を試みた點が後期の大なる進展である。經驗の與へると見られる所與は主觀に對しては現象たるに過ぎない。彼等は主觀の意識內容としてのみ所與である。然し現象は夢幻でもなければ假相でもない。彼等の對象性・客觀性は、彼等相互の間の結合(liaison)によつて保證される。Tout ces corps et tout ce qu'on leur attribue, ne sont point des substances, mais seulement des phenomenes bien fondés. ou le fondment des apparences, qui sont differentes en differens observateurs, mais qui ont du rapport et viennent d'une mlme fondement comme les apparencesdifferen tes d'une même ville vue de plusieurs cotés. (G. III.322)。而して此現象の基礎 (fondement) を與ふるものは第一に自覺の綜合作用である。第二に自覺の可能なる爲めの前提であると共に自覺によつて初めて認識せられる必然的眞理である。(Nouveaux Essais, Livre IV, Chap. 4)。斯く解する時は此第四條の意味は直ちにカントの現象論的認識論に近づき來り、ライプニッツの自覺はカントの先驗統覺と相距る一歩となるであらう。自我は無窓のモナードであると見るライプニッツには、普通の意味に於ての模寫主義の認識論は閉ざされた途である。必ずや現象論を說かねばならぬ。現象論に立つて最もよく知識の客觀性を擁護することの出來るのは自覺の綜合である。彼は實に此意味に於て直ちにカントの先驅をなして居るのである。

第五條の雜多の現象の原因として自我以外の實體を想定すると云ふことは、成熟期以後には云はれない。他より働きを受けることも他に働きかけることも共に禁ぜられた無窓の自我には、その內容なる雜多の原因として他の實體を許すと云ふ論理も同時に閉されて居るのである。如何なる理由によつて自我以外に多數の實體の存在を許すことが出來るかについては、ライプニッツの論理では證明がされてない。彼は恐らく神の完全欲に訴へ、所謂 Principe de Convenance に基く道德的確實性によつて之を證明する外はあるまい。彼は實際之れを行つて居るのである。(G.V.275,355-6, VII 303-4, 320-321)。人或は無同一の原理や連續律によつて自我と異り乍ら而も自我と本質上同一なる多數實體の存在を證明せんと試みるかも知れぬ。然し既にラッセルも詳論した通り此二原理は、もし多數の實體が存在するならば斯く斯くでなければならぬとの意味を表すのみで、此兩原理を根據として非我實體の存在を立證する事は出來ない (Russell, 54ff,65 f.)。私は思ふ此立證はライプニッツの自覺觀によつて或程度迄出來るではないかと。彼の自覺は一面眞理認識の第一原理であると共に(眞理自體の第一原理ではない)他面存在の第一原理である。自覺は自我の實體である事を自證する。而して此實體はライプニッツにあつては、個性的にして、同時に無

限を藏し無窮に進展する力である。此個性的であつて併も無限を藏し、部分的であつて併も全體を產む力と云ふ思想はライブニッツの意識作用(知覺及傾動)及び實在についての見解の最も根本的なる部分であると私は考へて居るが、此見解は彼の自覺觀より出たと見る外ない。而して此無限よりも個體を、全體よりも部分を prius と考ふる自覺に訴へての自我實體觀は、必然に無限數の實體を想定せしむるに至るのである。ラッセルより云へば明かに非論理的である。然し此意味にては主辭たるのみにて決して實辭とはならぬ主辭がある、卽ち自我は實體であると云ふ事が既に非論理的である。久遠の眞理自體の外に自覺と云ふ直接經驗の絕對的眞理を許すところに既にラッセルの所謂非論理性が根ざして居るのである。一度自我以外に多數の實體の存在を許せば、其等は自我實體――一層推しつめて云へば自覺を元として其本質を會得する外ない。此點に就てはライブニッツの所說は極めて明白である。例へば pour juger de la notion d'une substance individuelle, il est bon de consulter celle que j'ay de moy même, Comme il faut consulter la notion specifique de la sphere pour juger de ses proprietés. (Lettre à Arnauld, VIII, G. II. 45.) と云ひ、又 Et puisque je conçois que d'autres estres ont aussi le droit de dire Moy, ou qu'on le peut dire pour eux, c'est par là que je conçois ce qu'on appelle la substance en general. (G. VI, 493) と說くを見ても明らかである (Vlg. G. III. 247, V. 96)。卽ちライブニッ

ッは自我の本質によつて他實體の本質を把捉せよ、而して自我の本質は自覺に於て最も直接自明なりと云ふのである。(ラッセルの第五前提は私の云ふ第四第五とを併せて意味するのであらう)。

上來私はライプニッツの自覺の意味について、注意すべき六ヶ條をあげて、其思想の進展を略示すると共に、其認識論的實在論的意義に多少の解說を加へた。然し斷る迄もなく、これは進んで系統的に研究する以前の豫備、又は素材に過ぎない。私は此自覺觀を先づ二つの方向に區別してライプニッツの哲學を研究して見たいと思つて居る。一は自覺を彼の眞理說(必然的及び偶然的眞理)との關係に於て見るのである。これによつてラッセルが兩種前提の矛盾とか不齊合の歸結とか云ふものの實は然らず、却つて心理的前提を認めることによつて其論理的前提も深められたのであることを示し、それと共にライプニッツとカントとの歷史的關係をも明にして行きたいのである。他は自覺を彼の實在觀との關係に於て見るのである。之によつてモナード論の眞意を一層深く理解すると同時に、彼より產れた佛國心靈論的主意說の歷史的發展、並びにロッツェの形而上學をも理解する助けとしたいと思ふ。而して自分の問題としては久遠妥當の眞理と偶然流轉の存在とが相卽相入し論理と形而上學の

契合點になつて居るライブニッツの自覺の眞義を徹底的に究めて見たいと願ふものである。第一の問題を研究するには、自覺說に先立つて而して或程度迄之れと獨立に成立せる彼の眞理觀を窺はねばならぬ。『ロッツェ妥當說の由來』九以下の叙述は此眞理說を中心とするものである。第二の問題がロッツェと交涉する處は、彼の妥當說を終つて後、妥當と實在との關係をロッツェは如何樣に考へて居たかを考察する場合に觸れて見たいと思つて居る。而して佛國心靈論的主意說のライブニッツに對する史的關係は、世間に餘り知られて居ないと思はれるから、哲學者の名と系統とを次に示して置かう。ライブニッツの實在論的方面を初めて佛國に移植開展させたのはメーヌ・ド・ビランである(Maine de Biran, Essais sur les fondements de la psychologie 1812–1822)。之を繼承して一層廣く深くライブニッツを解釋し他方次の世代の哲學者に至大の影響を及ぼしたのはラヴェーソンである(Ravaisson, De l'habitude 1832 La philosophie en France-au dix-neuvième siècle. 1867. v Ed. 1904. 私の讀んだのは此中後者だけであるが其中にも氏のライブニッツ及びド・ビランに對する歷史的關係の密接なことが明に分る)。ラヴェーソンの直接影響の下にライブニッツの實在觀を研究しこれを彼の眞理說(卽ち法則觀)との關係に於て考察したのがブートルーである(Boutroux, De la contingence des lois

de la nature. 1875)。而してベルグソンも亦ラヴェーソンの影響を受け、ライブニッツに溯り、彼の實在觀に獲たる處些少でないと推定して差支なき强き理由があるのである(Bergson, Essais sur les données immediates de la conscience 1889)。ラヴェーソンは又、ルヌーヴィエとタードに感化を與へた。其結果として前者に『新モナドロジー』(La nouvelle monadologie 1899)あり、後者に『モナドロジーと社會學』(Monadologie et sociologie 1893)がある。何れもライブニッツの多元論的形而上學が、彼等の哲學の一力素を提供して居ることを明示するものである。若し大膽なる概括論が許されるならばライブニッツの眞理論(論理を中心とす)はヘルバルト、ボルツァノによつて繼承され、其認識論(眞理と自覺との關係によつて說かれる)はカント及びフィヒテによつて深化され、而して其形而上學(自覺を基本として實在論を建設する)はメーヌ・ドゥ・ビランとラヴェーソンによつて佛國に移植されたと言ふことが出來るであらう。今日吾等の問題は此三者をライブニッツよりも更に深い統一焦點に於て綜合することであらう。而してこれに對してライブニッツ研究は有力なる示唆を與ふるものでは無いかと思ふ。

(六・十一・六)